



Kobe University Repository : Kernel

タイトル Title	「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009」と神戸大学東京オフィス (時評・書評・展示評)(Aonogahara POW Camp Exhibition in Tokyo Supported by Kobe University Tokyo Office (Current Topics and Reviews))
著者 Author(s)	植村, 達男
掲載誌・巻号・ページ Citation	Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科 地域連携センター年報,2:153-159
刊行日 Issue date	2010-08
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81002391

Create Date: 2017-12-18



してその成果をもう一度地域に還元する。地域と大学との新しい地域連携像を提示することが期待できる。

「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009」と神戸大学東京オフィス

植村 達男

二〇〇九年一月、神戸大学、兵庫県小野市、オーストリア大使館が主催するイベント「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009」が、東京で開催された。第一次世界大戦当時、青野原（現兵庫県小野市、加西市）に俘虜収容所があり、五〇〇名近いオーストリア・ハンガリー兵、ドイツ兵が四年四カ月の間生活していた。小野市の市史編纂の途上で発見されたドイツ兵の手記が神戸大学に持ち込まれたことから史実の究明が広がりを見ることになり、二〇〇五年の小野市、二〇〇六年の神戸大学、そして二〇〇八年にはオーストリアのウィーンで資料の展示会や兵士たちが楽しんだ音楽の再現演奏会が開催された。東京でのイベントは、その延長線上にあるものであった。

先ず一月七日、ドイツ文化会館 O A G ホール（港区青山）で講演会・再現演奏会が開催された。俘虜収容所の設置経緯の概要、地元民との様々な文化・スポーツ面での交流の実情に関して三人の講師から講演がある。また、当時俘虜が開催した演奏会プログラムをもとに当時の演奏曲目の再現演奏が神戸大学交響楽団有志により行われた。また、首都圏開催された今回のイベントでは、同じく第一次世界大戦当時俘虜収容所が設置された千葉県習志野市の市民有志がドッキングして俘虜収容所にちなんだコンサートもあった。以上の講演会・再現演奏会とは場所と日時を改めて開催されたのが展示会（一月二二日―二日、オーストリア大使館（港区元麻布））である。収容所生活や地元民との交流を物語る写真、俘虜の所持品、俘虜が作成した工芸品・絵画等が展示された。講演会・再現演奏会の詳細は、以下のとおり。

講演会・再現演奏会（一月七日、ドイツ文化会館）

講演会く青野原俘虜収容所の世界く

講演者プロフィール

・大津留 厚

神戸大学人文学研究科教授。ハプスブルグ帝国史、オ―

ストリア近現代史を研究分野としている。

・岸本 肇

東京未来大学こども心理学部教授。神戸大学名誉教授
(元・発達科学部教授)。体育学、体育科教育を研究分野
としている。

・ヘルムート・ヘードル

オーストリア・グラーツ大学所属。自らと同じオースト
リア人が収容されていた青野原俘虜収容所を修士論文の
テーマとし、現在も研究を続けている。

演奏会

町の音楽好きネットワーク(本拠地：習志野市大久保)

1. ヴァイオリンのための 閉じておくれ 僕の眼を

ハンス・ミリエス 曲／伊地知元子 編曲

2. アイネ・クライネ・ナハトムジーク

モーツァルト 曲

3. ホフマンの舟歌

オッフエンバッハ 曲

4. 舞踏への勧誘

ウエーバー 曲

5. 閉じておくれ 僕の眼を

ハンス・ミリエス 曲／伊地知元子 編曲／根本優子 訳詞

神戸大学交響楽団有志

1. 歌劇「バグダットの太守」序曲

ボワエルデュー 曲／田村文生 編曲

2. 巡礼の合唱(歌劇「タンホイザー」より)

ワグナー 曲／田村文生 編曲

3. 美しき青きドナウ

ヨハン・シュトラウス2世 曲／田村文生 編曲

4. 劇付随音楽「エグモント」序曲

ベートーヴェン 曲／田村文生 編曲

5. レヴリ

ヴェータン 曲

6. 軍隊行進曲第一番

シューベルト 曲

「青野原俘虜収容所展 E1 Tokyo 2009」について、神戸大
学東京オフィスに相談が持ち込まれたのは、二〇〇九年七月
のことである。大津留厚教授が上京、神戸大学の同窓会施設

神戸大学・小野市 地域連携事業
日本オーストリア交流年2009認定事業

第一次世界大戦当時、青野原（現兵庫県小野市、加西市）には俘虜収容所があり、500名近くのオーストリア・ハンガリー兵、ドイツ兵が4年4ヶ月の間生活していました。

神戸大学と小野市は、地域連携事業の一環として、青野原俘虜収容所の調査研究をおこない、その成果を小野市（2005年）神戸大学（2006年）ウィーン（2008年）と公開してきました。

ベルサイユ講和条約締結から90年目の今年、オーストリア大使館の全面的協力の下、資料展を開催します。





第一次世界大戦期
青野原 俘虜収容所展
in Tokyo 2009

入場無料

会 期：2009.11.12 (木) ~
2009.11.21 (土) (日曜休館)

開館時間：11:00 ~ 18:00
※11.21 (土) のみ 11:00 ~ 13:00

会 場：東京都港区 オーストリア文化フォーラム
(オーストリア大使館内)
(都営大江戸線・東京メトロ南北線
麻布十番駅 徒歩約5分)

神戸大学研究推進部研究推進課 地域交流企画係
TEL:078-803-5029 FAX:078-803-5049
e-mail:kusu-chiki@office.kobe-u.ac.jp

神戸大学地域連携推進室
HP: <http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiki/>

JAPAN AUSTRIA 2009

主催：神戸大学 小野市 オーストリア大使館

神戸大学・小野市 地域連携事業
日本オーストリア交流年2009認定事業




第一次世界大戦期
青野原俘虜収容所展
in Tokyo 2009

講演会・再現演奏会

日時：2009.11.7(土)
17:00~(開場16:30)

会場：東京都港区
ドイツ文化館1階 OAGホール
(東京メトロ銀座・半蔵門線 都営大江戸線
青山一丁目駅 徒歩約10分)

第一次世界大戦当時、青野原（現兵庫県小野市、加西市）には俘虜収容所があり、500名近くのオーストリア・ハンガリー兵、ドイツ兵が4年4ヶ月の間生活していました。

神戸大学と小野市は、地域連携事業の一環として、青野原俘虜収容所の調査研究をおこない、その成果を小野市（2005年）神戸大学（2006年）ウィーン（2008年）と公開してきました。

ベルサイユ講和条約締結から90年目の今年、オーストリア大使館の全面的協力の下、外交文書館、防衛研究所、ドイツ文化センターなどの協力を得ながら、資料展、関連講演会、再現演奏会を開催します。

90年分の俘虜たちの生活に思いを馳せ、彼らが異国で働いた音楽に耳をたのむことができます。

-PROGRAM-

講演会 ~青野原俘虜収容所の世界~
大講堂 厚 (神戸大学)
岸本 肇 (東京未来大学・神戸大学名誉教授)
ヘルムート・ヘッド (クラウツ大学)

再現演奏会 ~ 音 笛 ~
モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク
ウェーバー：舞臺への勧誘
シュトラウス：美しく青きドナウ
ヴェーグマン：夢
ペーターヴェン：エグモント序曲
シューベルト：軍隊行進曲第1番
他

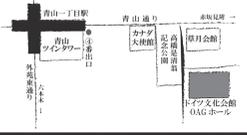
入場無料
※観覧をご希望の方は裏面の申込書にて、事前にお申し込みください。

主 催：神戸大学 小野市 オーストリア大使館
後 援：習志野市教育委員会

お問い合わせ先
神戸大学研究推進部研究推進課
研究・地域交流企画係
TEL:078-803-5029 FAX:078-803-5049
e-mail:kusu-chiki@office.kobe-u.ac.jp

JAPAN AUSTRIA 2009

神戸大学地域連携推進室
<http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiki/>

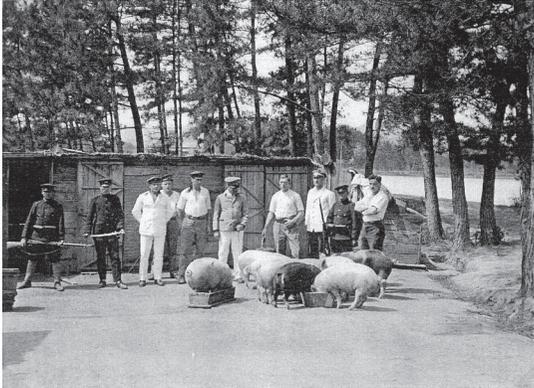


(東京凌霜クラブ)内に設置されている神戸大学東京オフィスで面談、プロジェクトの概要をお聞きして、全面的協力をお約束した。その後、千葉県習志野市(前述のように、この地にも俘虜収容所があった)の音楽サークル「町の音楽好きネットワーク」の代表者戸田志香氏(声楽家)との打ち合わせ(八月、於高田馬場)、毎日新聞・日本経済新聞両社の記者インタビュー(八月、東京凌霜クラブ)がある。この時点では、まだ詳細なスケジュール(場所、日程)は決定しておらず、し

たがってチラシもできていない。九月になってカラー印刷のチラシ二種類が送られて来た。十一月七日にドイツ文化会館OAGホールで開催される「講演会・再現演奏会」のチラシが黄緑色、十一月二日から十一月二日迄オーストリア大使館で開催される「展示会」のチラシが青色を基調としたものである。同じく九月には、大津留教授、奥村弘教授、神戸大学地域連携センター職員、そして小野市立好古館大村敬通館長等とともに麻布十番商店街に近いオーストリア大使館を

訪問した。ミヒヤエル・ハイダー文化担当参事官にご挨拶するとともに、展示会場の下見を行う。チラシ（二種類：別掲）が出来上がってからは、東京凌霜クラブで掌握している首都圏在勤・在住の神戸大学同窓生約一〇〇〇人に対して電子メール（一部ファックス）による配信を行う。同時にチラシそのものをメール便（他の発信資料に同封するケースが殆ど）で送ることも実行した。

九月末頃、「講演会・再現音楽会」の参加者数が少ないことが判明しショックを受けた。寂しい会場では、講演者や演奏者に申し訳ない。神戸大学の恥さらしにもなりかねない。そこで、東京凌霜クラブから電子メールの再配信を行い、また卒業生以外の分野への個別PRを心がけた。東京オフィスがある帝劇ビル内にある喫茶店の店頭、新規開店した



ばかりの歯科医の待合室にチラシを置いてもらうといった身近なところから始めた。近くのレストラン「とちの」は、神戸大学ゆかりの店（経営者の奥様が国際協力研究科の修了生）だったので同様のお願いをする。また、神戸大学にほぼコンスタントに入学者を送り込んでいる都立青山高校の進路指導室を訪問、神戸大学の各種広報資料を届けるとともに前記チラシもお届けした。偶然にも、青山高校は大津留教授の母校でもある。青野原俘虜收容所というテーマは、第一次世界大戦に関係するので、「世界史の教材」にもなりうる。そう考えて、他の近隣の高校も回りたいかったが、経費（交通費）と時間の関係で、果たせなかった。他のPR先としては、渋谷の「たばこと塩の博物館」がある。同館で開催中の「やすらぎのオーストリア」展に行き、学芸員に依頼して、館内にチラシをおいてもらうことに成功した。そのほか、知人の



弁護士事務所（中央区）、定期的に通っているクリニック（新宿区）、長らく通い顔なじみとなった喫茶店（中央区）もチラシを置いてくれた。日本フイランソロピー協会（千代田区）、日本エッセイストクラブ（同）、専門図書館協議会事務局等の協力も得た。講演会・演奏会会場であるドイツ文化会館（港区）に近い虎屋文庫（和菓子の博物館）、港区役所赤坂支所にもチラシを置いて貰うことに成功。また、オーストリア大使館に近い明るい感じの喫茶店二軒も、食事に行つたついでにお願いした。

一〇月九日付日本経済新聞（文化欄、大津留教授による寄稿「捕虜に見る欧州史の断片、兵庫県の一次大戦収容所にハプスブルグ帝国の縮図」）に始まり、マスコミの報道が始まる。近年発見された豚と捕虜と衛兵の写真（別掲）も挿入された全八段の堂々たる論考であったこの記事は全国版であり、広報的には大きな効果があった。続いて、毎日新聞（東京版、一〇月一七日付）、朝日新聞（東京版、十一月五日付）、読売新聞（都民版、十一月七日付）と東京地区では四件の記事が流れ、一般市民がイベントに訪れることになる。毎日新聞、読売新聞には、捕虜が地元の女性や子供たちとともに撮影した集合写

真（別掲）が挿入され、当時の友好的な交流の実態が偲ばれるものであった。新聞記事を読んだ読者の殆どは、イベントには参加しなかつたわけであるが、「神戸大学の広報」という観点からは、東京地方版での告知記事は多大の貢献があったといえよう。以上の四件の記事のうち、日本経済新聞と毎日新聞（一〇月一七日付）は、東京丸の内三丁目の神戸大学東京オフィス（同窓会施設である東京凌霜クラブ内併設）で、あらかじめ行つた記者インタビューの成果。朝日新聞（十一月五日付）は神戸大学広報室を通じての根回しの結果である。読売新聞については、まったくの偶然が作用した。読売本社編集局地方部次長が神戸高校の卒業生で、たまたま一〇月二四日に大手町で開催された神戸高校同窓会で私と席が近く、直接お願いして掲載に至つたもの。ただし、掲載日が十一月七日（講演会・演奏会「当日」と、間際であったのが惜しまれる。

最後に、今回のイベントで思いがけない出来事があった。それは「講演会・再現演奏会」と「展示会」双方に来られた中村摩利子さん（東京・杉並区）から伺つたエピソード。というのは、中村さんの父上が旧制姫路中学（現姫路西高校）

興地 実英氏 略歴

一九〇二（明治三五）年三月三日 兵庫県飾磨郡家島町徳号寺住職興地観円次男として生まれる。

一九二四（大正 三）年三月 家島小学校卒業
 一九一九（大正 八）年三月 兵庫県立姫路中学校卒業
 一九二三（大正一二）年三月 旧制第四高等学校卒業
 一九二六（大正一五）年三月 東京大学文学部独文科卒業
 一九二六（大正一五）年四月 旧制大阪高等学校に就職
 一九四一（昭和一六）年九月 旧制浦和高等学校に転任
 一九四七（昭和二二）年四月五日 肝臓ガンのため死亡

享年四五才



旧制大阪高等学校時代
(1940年)

時代、同級生とともに姫路にあった収容所を訪ね俘虜と交流したということである。これが契機となり、その中学生すなわち興地実英（おきち・じつえい、一九〇二—一九四七、写真）氏は金沢の第四高等学校（現金沢大学）の文乙（ドイツ語履修）に進む。更に東京帝国大学文学部でドイツ語を学び、旧制大阪高等学校（現大阪大学）、ついで旧制浦和高等学校（現埼玉大学）でドイツ語教師をつとめる。俘虜との交流が、興地氏の生涯の仕事に繋がった訳である。興地氏とともに俘虜と交流した姫路中学生の名も後日中村さんを通じて判明した。伊坂辰次郎氏であり、伊坂氏は母校の姫路中学の英語教師から旧制姫路高等学校（現神戸大学）で英語を教えたという偶然が重なっている。

中村さんからは、後日『興地実英遺稿集』、『興地実英遺稿集 続編』の二冊の本を頂戴した。別掲の遺影および略歴は、遺稿集から再録したものである。米田一彦神戸大学教授（後に名誉教授、英文学）も、『興地実英遺稿集 続編』の執筆者の一人。大阪高校時代の「興地先生のことなど」のタイトルで、恩師を語っている。私は一九六〇年（昭和三五）四月、神戸大学に入学した当初に教養課程で米田先生の英語の講義を聴いた。まさに「六〇年安保」の最中のこと。当時のテキストは、

ペンギンブックスの *Where Angels Fear to Tread* (Edward Morgan Forster, 1905) であった。

話題を『興地実英遺稿集』の方に戻そう。石濱恒夫（大阪高校）、金森久雄（浦和高校）、長幸男（浦和高校）諸氏も興地先生からドイツ語を習い、それぞれの思い出を書いていた。なお、中村摩利子さんからの通知で、興地先生の教え子七〜八人が、今回のイベントに参加していた。興地先生の人望が偲ばれる。

中村摩利子さんは、興地先生の次女。次の短歌二首は、長女の松本那智子さんの作品。今般、中村摩利子さんを通じて提供を受けた。

十代の父が通いし青野原

英会話の友ドイツ兵たち

ドイツ語を学びし父の原点か

青野原なる俘虜収容所